※こちらは見本用のPDFです

幼児造形の基礎―乳幼児の造形表現と造形教材　目 次

まえがき――3

第１章　幼児造形とは――9

1.幼児の造形教育のねらい―幼児教育上の「資質・能力」と「10の姿」
［鈴木裕子・樋口一成］――10
2.幼児の育ちと造形教育［磯部錦司］――14
3.自然や人との出会い［磯部錦司］――16

第２章　幼児の造形教育の方法――19

1.教材づくり［江村和彦］――20
2.素材との出会い［西村志磨］――22
3.生活環境・自然環境の活用［西村志磨］――24
4.行事における造形活動―行事での造形、展示の在り方や方法［西村志磨］――26
5.子どもの表現を生み出す人的な環境としての保育者の役割［西垣吉之］――28
6.子どもの主体を生かす保育―ものとの関わりを中心に［西垣吉之］――30
7.模擬保育とは［石川博章］――42
8.造形に関する模擬保育の実践―準備・実施・ふりかえり［石川博章］――43
9.参観の方法、実習や教材研究の進め方　［堀　祥子］――46

第３章　幼児の造形教育の教材―材料や技法の基礎理解――49

1.絵の具―絵の具・筆の種類と基本的な使い方［安藤恭子］――50
2.絵の具の技法―絵の具や道具の活用［水谷誠孝］――52
3.クレヨン・パス―材料、基本的な使い方［松田ほなみ］――54
4.クレヨン・パスの活用［藤岡孝充・矢野　真］――56
5.マーカー・ペン［早矢仕晶子・水谷誠孝］――60
6.鉛筆・色鉛筆―材料の特徴、活用［桂川成美］――62
7.画用紙・和紙―紙の種類や特徴［桂川成美］――64
8.画用紙・和紙の活用―描画等への活用［水谷誠孝］――66
9.版画①―版の種類や用具の使い方［新實広記］――68
10.版画②―版や写し遊びの技法のダイジェスト［釆睪真澄］――70
11.砂と土［西村志磨］――72
12.粘土造形―粘土の種類や用具、活用［江村和彦］――74
13.牛乳パックと段ボール箱［石川博章］――76
14.新聞紙・チラシ［早矢仕晶子］――78
15.紙コップ・紙皿などの活用［加藤克俊］――80
16.切る―紙とハサミを使って［石川博章］――82
17.くっつける―でんぷんノリ・木工用ボンド・ホチキス・セロハンテープ
［樋口一成］――84
18.木片・枝―板・木片・竹・実・小枝・葉、材料の特徴、活用法［釆睪真澄］――86
19.木工道具を使おう［加藤克俊］――88
20.繊維素材［堀　祥子］――90
21.ビニール―ビニール袋・スズランテープ等の活用法［安藤恭子］――92
22.プラスチック―容器や活用法［西村志磨］――94
23.金属の材料―アルミホイルや針金・モール等［佐々木雅浩］――96

第４章　幼児造形教育への実践―大学での実技体験や教育現場での実践例――99

1.並べる・組み合わせる［加藤克俊］――100
2.ドロ紙の造形［浅野秀男］――102
3.手や身体で触れる［磯部錦司］――104
4.描いてみよう①―描画の基本、見方・描き方［小林　修］――106
5.描いてみよう②―筆や手を使った描画の実践［水谷誠孝］――108
6.想像の世界を絵で表す―イメージを膨らませて楽しく描く［小江和樹］――110
7.平面技法の基本―32の基本技法［樋口一成］――112
8.平面技法の応用①　にじみ［早矢仕晶子］――120
9.平面技法の応用②　ドリッピング・デカルコマニー［桂川成美］――122
10.平面技法の応用③　スクラッチ―ひっかいて描く［松田ほなみ］――124
11.平面技法の応用④　マーブリング［松田ほなみ］――126
12.平面技法の応用⑤　フロッタージュ―擦り出しで魚をつくる［山本政幸］
――128
13.コラージュ［新實広記］――130
14.切り紙・切り絵［鈴木安由美］――132
15.厚紙で仮面・かぶりものをつくる［鈴木安由美］――134
16.発想をかたちにする―紙を使った見立て遊び［山本麻美］――136
17.紙皿や紙コップと色画用紙を使った美容師ごっこ［加藤愛子］――138
18.画用紙を使って①―Ｚ折り、回転する絵、パズル的な絵［堀　祥子］――140
19.画用紙を使って②―動くペーパークラフト「テープの動変換」［樋口一成］――142
20.画用紙を使って③―動くペーパークラフト「アニマルフェイス」［樋口一成］
――144
21.画用紙を使って④―画用紙と和紙の違いを活かした活用［水谷誠孝］――146
22.版で表す―紙版画の特徴を活かした共同制作「海の生き物」［桂川成美］――148
23.スタンプ遊びの実践［藤田雅也］――150
24.ステンシル＆ローラー遊び［藤田雅也］――152

25.スチレン版画の実践［松田ほなみ］――154
26.ゴム版をつくろう［新實広記］――156
27.粘土で表す―粘土による表現の基礎［藤田雅也］――158
28.粘土遊び―体全体を使って［浅野秀男］――160
29.立体　粘土による表現の可能性［藤岡孝充］――162
30.陶芸―身近な道具を使って器をつくろう［江村和彦］――164
31.木を切る・打つことからの展開［新實広記］――166
32.木で表す［加藤克俊］――168
33.ビニール袋―コップからモコモコ飛び出す［江村和彦］――170
34.ビニールを使った実践［樋口一成］――172
35.羊毛フェルトを使った造形［堀　祥子］――174
36.いろいろな材料の造形①―紙を使って、絵画遊びと技法の造形［江崎榮彦］――176
37.いろいろな材料の造形②―自然物（木育）と人工物（ビニール袋）を活用した実践［矢野　真］――178
38.いろいろな材料の造形③―プラスチック容器やスチロールなどの実践［西村志磨］――180
39.いろいろな材料の造形④―プラスチック容器やスチロールなどの活用［安藤恭子］――182
40.いろいろな材料の造形⑤―アルミホイルや空き缶の実践［西村志磨］――184
41.いろいろな材料の造形⑥―アルミホイルや空き缶などの活用［安藤恭子］――186
42.光・影絵―ボンド・セロハンを用いた実践［本田郁子］――188
43.魅力的な壁面装飾の制作を求めて［中川泰］――190
44.紙芝居制作―ストーリーと絵、制作とパフォーマンス［松田ほなみ］――192
45.一人遣いの指人形制作―世界に一つの指人形で子どもたちと楽しい会話をしよう［江崎榮彦］――194
46.技法から絵本へ―モダンテクニックから絵本制作へ［藤岡孝充］――196
47.絵本づくりと読み聞かせ―原画の制作と簡単な製本［山本政幸］――198
48.共同での制作―ものづくり交流の教材実践［新實広記］――200
49.鑑賞（観賞）体験［小林　修］――202
50.美術鑑賞の今―鑑賞教育の現状と新しい取り組み［日野陽子］――204

第５章　幼児の発達と造形表現――207

1.乳児の表現［樋口一成］――208
2.五感や身体感覚［江村和彦］――210
3.身体表現と造形表現［鈴木裕子］――212
4.音楽表現と造形表現［麓 洋介］――214
5.材料体験による創意工夫―材料体験、発想や工夫、創造力を育てる［采睪真澄］――216
6.描画における発達段階［藤田雅也］――218
7.子どもの絵の意味［磯部錦司］――222
8.立体による造形表現の発達［藤田雅也］――224
9.心を支える美術の力―いのちに寄り添うアート［日野陽子］――226
10.障害児と造形表現［小川英彦］――230

第６章　幼児造形教育の歴史と海外の美術教育――233

1.幼児造形の流れ［石川博章］――234
2.海外の教育思想［浅野秀男］――236
3.創造主義の系譜［浅野秀男］――238
4.海外の幼児造形の動向―レッジョ・エミリアを中心にして［中川泰］――240
5.海外での実践レポート［磯部錦司］――242

第7章　幼児造形教育の広がり――245

1.教育施設の活用―子育ての場所や機会の広がり［江村和彦］――246
2.教育制度・連携―幼保一元化・認定子ども園、幼小の連携［中川　泰］――248
3.場のちから―身近な環境を創造の舞台に［吉田悦治］――250
4.環境を創造し生まれる造形活動―綿花や綿から感じる・知る・造形［菅野弘之］――252
5.施設の広がりについて［中川　泰］――254
6.児童館・美術館の活用―造形ワークショップの実践、利用法［中川　泰］――256
7.地域の特色と教育力［江村和彦］――258
8.地域での造形活動の実践［堀　祥子］――260
9.地域との連携の広がり［矢野　真］――262

第Ⅰ章

幼児造形とは

子どもたちは、日々の生活の中で、いろいろなモノに出会い、気づき、関心を抱く。周囲の自然、人、物などを見て、子どもたちならではの反応を見せてくれる。いろいろなモノへの興味や関心を一つのきっかけとして、子どもたちの造形的な表現が生まれる。そこには、見たものを表現する姿、自己を表現する姿、周囲にいる人へ何かを伝えようとする姿など様々である。大人の考える造形表現とは異なった解釈や判断がそこには必要となる。子どもたちの成長や発達を踏まえて、子どもたちならではの造形表現を理解し、正しく導こうとする姿勢がそこには必要となる。まわりの大人たちが子どもたちの造形表現にどれだけ寄り添い、共感し、適切な援助ができるかどうかが幼児造形にとってとても大切である。

1. 幼児の造形教育のねらい―幼児教育上の「資質・能力」と「10の姿」

平成29年（2017年）、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂され、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園ともに、幼児教育施設としてはっきりと位置づけられた。また、「幼児教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」も示された。今後、この「幼児教育において育みたい資質・能力」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の内容を見据えながら、幼児の造形表現を考えていくこととなる。

1. 幼児の造形教育の背景

平成27年度（2015年度）より、幼稚園・保育所・認定こども園等の特性を生かした良質かつ適切な教育・保育、地域の子育て支援を総合的に提供する体制を整備すること等を目的とした「子ども・子育て支援新制度」がスタートした。さらに、平成29年に、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の３法令が、同時に改訂（改定）、平成30年に施行され、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園ともに、幼児教育施設として位置づけられた。幼児教育が「環境を通して行う教育」を基本とすることは変わらず、その上で、子どもの育ちについて、幼児教育において育みたい「資質・能力」と、５歳児後半に見られるようになる姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。

2. 幼児教育において育みたい「資質・能力」の３つの柱

幼児教育において育みたい「資質・能力」は、小学校以降の学校教育において育成すべき資質・能力とつなげて捉える必要がある。「資質・能力」は、小学校、中学校、高等学校での学校教育全体を通して伸びていくものであり、その基礎が幼児期で培われるため、小学校以降の教育とのつながりが理解しやすいように、小学校以上で整理された「知識・技能」に対して幼児教育では「知識及び技能の基礎」、同「思考力、判断力、表現力等」に対して「思考力、判断力、表現力等の基礎」、同「学びに向かう力、人間性等」は「学びに向かう力、人間性等」として、３つの柱が示されている。

(1)「個別の知識や技能の基礎」

「個別の知識や技能の基礎」とは、「幼児が遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何かを感じたり、何かに気付いたり、何かがわかったり、何かができるようになっていくこと」と定義づけられている[1)]。子どもが周囲の出来事や環境に興味や関心を抱いて体験したことが、いずれ知識や技能につながっていくこと。そのための基礎と捉えるとよい。このことを造形表現の場面で捉えると、例えば、子どもたちが紙皿やストロー等が用意されている環境の下で、それらを使ってかざぐるまをつくろうと取り組んだ時、保育者につくる方法を教えてもらいながら自分のペースでゆっくりつくっていく。はじめに紙皿の一部を切り取ったり、紙皿に絵を描いたり、２枚の紙皿をホチキスで留めたり、さらに穴開けパンチで穴を開けたりしながら、最後に部品を組み合わせて完成となる（図１～３）。この一連の制作過程の中で、子どもたちは、初めてハサミで紙皿を切ることになったり、初めて穴開けパンチで穴を開けたりすることがある。また、初めて知る紙皿かざぐるまの形に驚くかもしれない。いろいろな初めての体験を通して、最後に一生懸命につくり上げた紙皿かざぐるまが気持ちよく回った時、大きな喜びと達成感を得ることができる（図４）。また、これまでに体験していた製作過程や道具であっても、繰り返し体験したり何度も道具を用いたりすることによって、芸術表現のための基礎的な技能の獲得や様々な気づきを得ることができる。このようなことが「個別の知識や技能の基礎」として捉えられる。「個別の知識や技能の基礎」には、様々な気づき・芸術表現のための基礎的な技能の獲得のほか、発見の喜び・規則性、法則性、関連性等の発見等が含まれる。

(2)「思考力、判断力、表現力等の基礎」

「思考力、判断力、表現力等の基礎」とは、「幼児が遊びや生活の中で、気づいたこと、できるようになったことなども使いながら、どう考えたり、試したり、工夫したり、表現したりするかということ」と定義づけられている[2)]。このことを造形表現の場面で捉えると、例えば、子どもたちがいろいろな木片が用意されている環境の下で、それらを使って顔のあるおもちゃをつくろうと取り組んだ時、いろいろな大きさや形の木片を手にして子どもたちがつくりたいと思う顔を考えながらつくり上げていく。はじめに考えた顔の形に向かってつくり上げていくのではなく、いろいろな木片の大きさや形をじっくり眺めてみたり、顔の土台となる板の上に置いてみたり、試行錯誤しながら顔のおもちゃをつくり上げていく時、その場所に置くことのできない木片の大きさや形に気づいたり、接着剤の適量に気づいたりする（図５～７）。ときには上手くいったり、思っていた以上の形ができ上がったりすることがある。この試行錯誤しながらの成功経験が積み重ねられていくことで具体的な技術や方法に気づき、そのことが繰り返しできるようになったり、大きな達成感を味わったりすることができるようになる（図８、９）。また、成功経験ばかりではなく、形を上手くつくり上げることができなかったり、接着が上手くいかなかったりした時には、上手に制作することができなかった体験を知識として得ることができる（図10）。このようなことが、「思考力、判断力、表現力等の基礎」と捉えられる。「思考力、判断力、表現力等の基礎」には、試行錯誤・達成感のほか、工夫・予想、予測、比較、分類、確認・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ・ふりかえり、次への見通し・自分なりの表現等が含まれる。

(3)「学びに向かう力、人間性等」

「学びに向かう力、人間性等」とは、「幼児の心情、意欲、態度が育つ中で、どのように社会・世界と関わり、いかによりよい生活を営むかといった資質・能力」と定義づけられている[3)]。前者２つの柱が「知的な力」であるのに対して、この柱は「情緒的な力」とされる。この土台がないと思考力、判断力、表現力等、ましてや知識や技能の基礎は生まれない。このことを造形表現の場面で捉えると、例えば、子どもたちが数多くの空き缶や板などが用意されている環境の下で、それらを使って街をつくろうと取

1）、2）、3）文部科学省『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）』平成27年8月

図１. 紙皿をハサミで切る子ども

図２. 紙皿にサインペンで絵を描く子ども

図３. 穴開けパンチで穴を開けている子ども

図４. 完成した紙皿かざぐるま

図５. いろいろな木片の中からパーツを選ぶ

図６. いろいろな木片を並べ替えて作品をイメージする

図７. 木工用ボンドで接着する

図８. 新しい材料や道具を体験する

図９. 完成した木の作品

図10. 完成した木の作品

2. 絵の具の技法―絵の具や道具の活用

絵の具は、発色が美しく表現も多様であり、子どもたちの色彩へのイメージを膨らませてくれる。そのため、子どもたちが生活の中で色や形について気づいたり楽しんだりする上で重要な色材であるといえる。配色によって色の感じ方が異なる、混色によって新たな色ができる、用いる技法によって多彩な表現が楽しめるなどの面白さを見つけ、色彩や形で子どもたちが思ったことを表現する楽しさへとつなげたい。

1. 水彩絵の具の種類

水彩絵の具の種類は、透明水彩絵の具と不透明水彩絵の具（グァッシュ）があり、それぞれに特性がある。

(1)透明水彩絵の具

透明感のある色彩が特徴で、紙に描いた時に絵の具を通して紙の色が透けて見える。透明感のある白を表現する時は、水を多く加えて調整し、白色の絵の具を使用しない。

(2)不透明水彩絵の具

鮮明な色彩が特徴である。絵の具が透けずに紙を色が覆いつくすため、下地の色を気にせず塗り重ねることができる。

2. 絵の具の技法・活用

水彩画は、水彩絵の具の使用方法が容易であることから、教育の現場では馴染みのある技法で、その表現力は多彩である。

(1)グラデーションと濃淡（図１）

基本となる色に白色の絵の具を加える割合を調節して、明暗の調子を変えることができる。また、絵の具に加える水の量を調節し、色の濃淡を表現することもできる。赤色に白や水を加え、明るい赤・淡い赤など、赤色にも調子の異なるものがあることを保育者が子どもたちに伝え、色をつくってあげるのもよい。

(2)ウエット・イン・ウェット（図２）

幅の広い平筆やスポンジなどで紙面に水や絵の具を引き、濡れた状態の紙面に、たっぷりと水分を含ませた絵の具を塗り、色を混ぜ合わせる。

(3)ドライ・オン・ウェット（図３）

着色面が乾いた後にさらに色の層を重ね、色調や色の濃さを変える。

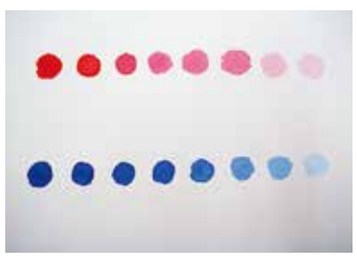
図１. 水を加えて濃淡を出したもの（上）、白を加えて明暗の調子を出したもの（下）

図２. ウェット・イン・ウェット

図３. ドライ・オン・ウェット

図４. ドライブラシ

図５. ウォッシュ

図６. バチック

図７. 洗剤を混ぜた絵の具で描く

(4)ドライブラシ（図４）

筆の穂先の水気をよく切り、色がかすれるように紙上に着彩する。

(5)ウォッシュ（図５）

たっぷりと水を含ませた絵の具を、紙の広い面積に淡く塗り広げる。

(6)バチック（図６）

ロウや油が水と反発する性質を利用して、クレヨン・パス・ロウソクで描いた後に水彩絵の具を重ね、絵の具がロウや油にはじかれた表現を楽しむことができる。

(7)洗剤（図７）

水彩絵の具に少量の洗剤を混ぜることで、界面活性剤の働きによりガラスやペットボトル、発砲スチロールなどにも描くことができる。

(8)染料

染料は水に溶解し、光を透過する性質がある。水に溶解した染料は、糸や紙などの吸収性のある物質に吸着する働きがあるため、色水遊びや染めつけ遊びなどに使用する。身近に入手できる染料としては、教材用染料や食紅、インクなどがある。

3. 筆・手・ローラー

絵の具は画面に定着させる手段や道具によって、でき上がってくる表情が異なる。下記以外の画材として、綿棒・歯ブラシ・ペン・スポンジ・布など、身のまわりにある素材でも多彩な表現を楽しむことができる。

(1)筆の活用（図８）

筆には丸筆や平筆などの形やサイズの違いがあり、選択肢は広いため、表現の用途に合わせて使い分けるようにする。筆の持ち方によっても、様々な表現が楽しめる。

(2)手の活用（図９）

指先や手の側面、手のひらなどの手形・指形を使って、いろいろな形の表現を楽しむことができる。

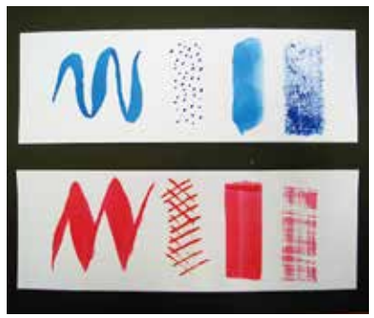
図８. 丸筆（上）、平筆（下）

図９. 手を使ったいろいろな表現

(3)ローラーの活用

ローラーは、回転を利用した表現を楽しむことができる。描画には、発泡ポリエチレン製やスポンジ製のものが使われることが多く、形状は、筒状のものや球体、凹凸がついたものなど多様である。

［水谷誠孝］

9. 版画①―版の種類や用具の使い方

版画の種類は凸版や凹版、平版、孔版に大別することができるが、版画の材質、技法で区別すると多様な種類がある。しかし、幼児にとっての版画遊びは生活の遊びの中で自然に行われていることが多い。たとえば、粘土遊びの時に泥のついた手を粘土板に押しつけ手型押しをしていたり、水遊びの時にできた自分の足跡を発見し足跡をつけて歩き回るスタンプ遊びをするなどである。また、幼児の版画では、紙版画のために切り抜かれた紙の一方がステンシルの型になったり、ローラー遊びのパレットがモノプリントの版になったりするなど、自然に新しい版画の技法を発見していくことがある。このような自発的な版画活動を行うためには、技法にとらわれすぎず幼児の発達段階に応じてそれぞれの写す喜びを味わう方法で行うことが大切である。また、幼児の版画には特別な道具や材料を用意するのではなく、身近にあるあらゆる素材を版にして版画的遊びとして楽しむことで、物の形や表面の手触りなどに意識が働くようにしたい。

図1. スタンピング

図2. デカルコマニー

図3. フィンガーペインティング

図4. マーブリング

図5. フロッタージュ

1. 版画の種類

(1)スタンピング(図1)

空き箱や野菜の断面、木片やプラスチックのフタなど、身のまわりにある思いつく面白い形や単純な形を組み合わせて型押しを楽しむことができる。手にした物の形からは想像できないイメージが型押しされることが面白い。幼児には、型押しで何かを描くことよりも、様々な物で型押しし、同じものが次々に表れることの不思議な世界を楽しませたい。

(2)デカルコマニー(図2)

紙を二つ折りにして、開いた一方の折り目の近くに自由に色をつけ、再び紙を閉じて、手で強く擦って再び広げてみると、色をつけた反対側に転写されて左右対称に偶然に生まれた不思議な形や色の模様ができる。その不思議な模様がいろいろなことを想像させることから、心理学のロールシャッハテストとして用いられている。

(3)モノプリント(図3)

モノプリントは、1枚の版で1枚の絵しか刷ることができない版画である。幼児の場合、指で描く絵の具遊び(フィンガーペインティング)から発展するとよい。プラスチックの板や水で塗らした画用紙を机に密着させて自由に絵の具をのせ、指やヘラ、割り箸などで模様をつけ、吸水性のある紙を上に置いて軽くなでて刷りとると、思いもよらない表現が現れる。

(4)墨流し・マーブリング(図4)

平らな容器に水を張り、墨汁や油性の版画絵の具を油(灯油)で薄めたものや、市販のマーブリング用絵の具などを水の表面に数滴浮かして、水の上で流れる絵の具の模様を紙に写しとる技法である。人の手では描けない不思議な流紋が美しく表現できる。平らな紙以外にも、給水性のある素材なら紙コップや布にも写しとることができる。

(5)擦り出し・フロッタージュ(図5)

木の皮や葉、凹凸のある壁などにトレーシングペーパーなどの薄紙をのせ、色鉛筆やクレヨンなどで擦り出し描く転写技法。幼児には先の細い色鉛筆よりもクレヨンが扱いやすい。普段生活している教室や園庭を探検し、様々な凹凸を見つけ転写することで、物の材質を感じ取りながらイメージを超えた楽しい描画体験ができる。

図6. ステンシル

(6)ステンシル(図6)

ステンシルには、花や動物などの簡単な形を型抜きし、穴の中に絵の具を刷り込む内塗りと、型のまわりに刷り込む外塗りがある。それ以外にも紙切れや葉、毛糸、網などを画用紙に置き、絵の具をつけたローラーを転がすだけでもステンシルの表現ができる。

図7. ローラー版画

(7)ローラー版画(図7)

ローラーの軌跡を描いたり、ローラーに直接たくさんの色を点でつけて転がして描いたり、木の葉の上でローラーを転がして表面についた凹凸を転写したりする版画で、様々なローラー遊びができる。幼児にとってローラーは、体全体で転がしたくなる動く玩具である。ローラー遊びから自然にステンシルなどのほかの版画技法の活動が行われるケースもよく見られる。

図8. スチレン版画

(8)スチレン版画(図8)

加工しやすいスチレン板を、鉛筆や釘でひっかいたり切ったりして版をつくって印刷する技法。スチレンボードは軟らかく、幼児でもいろいろな材料や用具で跡をつけて版をつくることができる。肉や魚が入っていたトレイなど廃材のスチレン皿を再利用すれば、簡単に材料が準備できる。

図9. 紙版画

(9)紙版画(図9)

切ったりちぎったりした紙を貼り重ねるなどして版をつくり印刷する技法。凹凸のついた柄紙や、布や糸などを使う方法もある。ハサミを使うことができる幼児は、自由に紙を切り取り、見立て遊びで創造的な版画制作を行うことができる。ハサミがまだうまく使えない幼児は、手で紙をちぎって台紙に貼ることで紙版画の版を制作することができる。

2. 版画の用具(図10、11)

図10. ローラー

図11. バレン

1. ローラー…ローラーは、版画遊びの時にとても便利な道具。版にインクをつけたり、直接紙に絵を描いたり、様々な使い方ができる。材質や幅や形の違うものがあり、ゴムローラーや、発泡ポリエチレンローラー、スポンジローラー、円柱形、球形のローラーなどがある。洗ったローラーは、形の変形を避けるためにローラースタンドなどに吊るし、スポンジ部分に圧力をかけないように保存する。
2. インク…インクには版画用のものがある。紙版画などの刷りを行う時は、紙が貼りついてとれなくなってしまうことがあるが、版画用のインクを使用すると軽減される。また、インクの粘性が、版画の刷りやローラーなどで扱いやすいよう調整されている。油性インクと水性インクがあり、黒以外にもカラフルな色があって、混色もできる。水性インクの方が後片づけなどが簡単なため、幼児には扱いやすくてよい。
3. バレン…インクが塗られた版から紙に写しとる時に、刷り取り用の紙の上から擦って使用する道具。転写時にバレンをしっかり握って版全体に力を入れて擦ると、色のムラが減ってきれいに仕上がる。

［新實広記］

15. 紙コップ・紙皿などの活用

障子、屏風、ふすま、提灯など、日本人は古来より生活の中に紙を使う場面が多い。それら道具のほとんどは半永久的に使用することを目的としており、取り替えることを前提とした部分に紙は使われる（張り替えられる）。しかし、現代においてはトイレットペーパーやティッシュペーパー、そして紙コップ・紙皿などのように、紙製品は使い捨てのイメージすらある。造形材料として活用したい。

1）バガス
サトウキビを搾った後の搾りかす

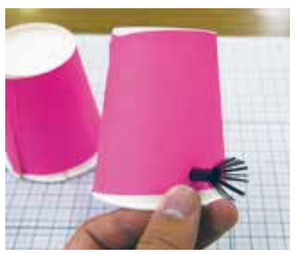

図1．穴が大きくなり過ぎないよう注意

図2．放射状の折り筋で8等分する

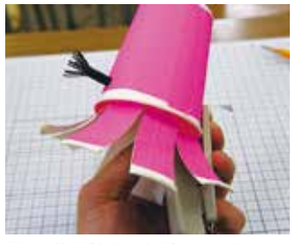

図3．後頭部に1か所ホチキス留め

図4．完成品

1. 紙製品を使った工作のねらい

たとえば最近では再生紙を使ったものや、非木材である竹、アシ、バガス[1)]といったパルプの代替原料による製品も多い。そういった観点から環境問題への意識を高めることに結びつけていくこともできる。または、一般的に用途が決まっているものを造形素材として使うことで、ものの価値や用途は決まっているものではなく、それを使う人が決めることができるといった、生活の中にある小さな固定観念の打破が挙げられる。そのほかにも、製品となっているものを造形素材とすることは、何かに見立てたり、少し加工することで面白い形にしたり、工夫を必要とする教材になる。

2. 紙コップの工作（タコをつくろう）

紙コップを使ったタコのつくり方には、以下の手順のように、いろいろと応用して使える技法があるので紹介する。

⑴2つの紙コップに折り紙を貼る

半分に切った折り紙を真ん中から貼り、余分な個所は切り落とす。なるべく白い部分が出ないよう注意する。

⑵墨を吐く（図1）

折り紙を貼った紙コップの1つに鉛筆で穴を開ける。黒いストローを適当な長さに切り、先を細かく切って広げたものを穴に挿す。

⑶8本脚をつくる（図2）

折り紙を三角形に3回折って広げると、8本の放射状の線ができる。紙コップを中心に置き、線に沿ったところに印をつけると8等分できる。

⑷脚を丸める

8等分に切った脚に鉛筆を沿わせると、くるっとカールした状態になる。

⑸頭と脚をつける（図3）

紙コップはスタックできる形のため、頭や脚として固定するには工夫が必要であるが、ホチキスを使って後頭部に留めれば簡単である。模様を描いたり貼ったりして完成（図4）。

3. 紙皿の工作（ゆらゆらおもちゃをつくろう）

紙皿を半分に折ると、ゆらゆらと揺れる形ができ上がる。ここではその動きを動力としてさらに工夫する工作を紹介する。反復して揺れる単純な動きは、そこからどんな動きに変えることができるか考えることができる良い材料である。

図5．ヒゲが揺れる作品

⑴基本の形と仕組みを知る

紙皿を半分に折って揺れる形ができることを見せる。この揺れは作品の高さが出ると大きな動きになる。また、装飾する際に、左右の重さをバランス良くしなくては、きれいに揺れない。

⑵揺れるパーツを考える

紙皿の揺れを動力として、どのような揺れるパーツをつけることができるか、全体的なイメージから揺れるパーツを、もしくはそのパーツから全体を考えていく。

⑶揺れるパーツの注意点

紙皿は山型に折っているため、紙皿の斜面に触れるように揺れるパーツを取りつけてしまっては、摩擦で動かないことがある。また、揺れるパーツが地に接するほど大きいと動かない。折った紙皿に画用紙を2枚、逆Yの字になるよう貼り合わせて、画用紙で垂直面をつくったところに揺れるパーツをつけることが理想的である（図5）。

⑷パーツを揺らす方法

竹串を挿してパーツを留めたり、凧糸などで吊るしたりすることで、パーツを揺らすことができる。

4. 新聞紙でファッションショー

新聞紙は再生紙によってつくられている。造形素材としては、簡単に、しかも大量に手に入りやすい材料である。この新聞紙を使って、グループワークで服をつくってもらう。新聞紙は軽くてボリュームを出しやすく、切ったり貼ったりも容易である。また、よく見るとカラー刷りのところもあり、白黒の材料の中にアクセントとして使える素材を探す楽しみがある。4人ほどのグループで、はじめにどんなデザインにするかを話し合い、絵に描き起こしてつくっていく。こうした実践は身につけるもののデザインということで、つくり始めるとそれぞれに非常にこだわりが表現され、あれもこれもと装飾の追加があり、面白い作品を見せてくれる。また、筆者は発表の場として教室に花道をつくり、ライティングと音と映像で、「新聞紙でファッションショー」の演出をした（図6、7）。

図6．身につけるものの制作にはこだわりが現れる

図7．発表の場を演出することで、より良い鑑賞ができる

［加藤克俊］

1. 並べる・組み合わせる

子どもたちが造形活動に取り組む中で、繰り返しの要素に集中したり、順に並べたりして楽しんでいる様子を目にすることは多い。手に取ったものを比較して配置や組み合わせる行為は、制作者の意図が込められた、表現活動となる。子どもたちは生活環境の中で様々な素材に触れる機会があるが、固定概念にとらわれずすべてを造形素材と捉え、生活環境＝造形環境といった認識を子どもたちの中に育んでいきたい。

みどりをかこう！

図1. 外に出て葉っぱを集める

図2. うまくできたものを切り抜く

図3. 好きな形に並べてみる

図4. さらに描きこんで完成

1. 実践のねらい

①自然の色、形に触れ、季節の移り変わりを感じ、整った工業製品とは違った制作過程を楽しむことができる。

②素材を集めるところから活動が始まることで、子どもたちはそれぞれの基準をもって選択し、素材を組み合わせながら制作することができる。

2. 準備するもの

- 画用紙　• コピー用紙　• クレヨン　• 絵の具セット
- ハサミ　• ノリ　• 新聞紙

3.実践の流れ

(1)汚れ防止のために机に新聞紙を敷く。机が小さい場合は床で活動する。

(2)作例を見せてフロッタージュ（p128、129）の説明をしておく。子どもたちと外に出て、５種類の葉っぱを採りに行く(図１)。変わった形の葉っぱを子どもが採っていたら、どこで採ったのか聞いてみると、まわりの子どもたちも面白い形の葉っぱを探し始める。子どもは採りにくい場所の葉っぱを好んで採ろうとするので、ケガがないよう配慮する。

(3)部屋に戻ったらコピー用紙とクレヨンを用意し、フロッタージュを用いて制作する。クレヨンを寝かして使う方法を説明する。子どもは葉っぱと紙を押さえながらクレヨンを使うことが難しい。はじめは手を取りながら指導し、できる子がいればできていない子に教えるよう促すのもよい。

(4)いろいろな色で写し取った葉っぱを切り抜き(図２)、画用紙に並べて貼っていく。しっかり貼るために新聞紙などを上に被せ、こすってはがれないようにする（押さえ紙）。カタログ的に並べる子もいれば、何かの形に見立てて並べる子もいる(図３)。

(5)クレヨンや絵の具を使って描き足し、パチックを加えるなどしても楽しい(図４)。

4. 活動の留意点

子どもたちの生活環境には様々な自然素材があり、手に取ることができるが、保育者、指導者があらかじめそれらを把握しておくことが必要である。また、子どもたちが自然との触れ合いを楽しめるよう、日頃から季節の移り変わりや、変化の様子を話に織り交ぜるなどして、子どもたちの視線がそちらに向くように促す。

図5. 枯れ葉の匂いを感じながら

図6. ボンドをヘラでのばして接着

図7. いろいろなデザインのメダル

図8. らせん状にくっつけていく

図9. 正方形の板に貼っていく

図10. 完成作品

はっぱでつくろう冬のメダル

1. 実践のねらい

①冬の枯れ葉や木の実の褐色の中にはそれぞれに特徴があり、手に取って比べるとその違いを見つけることができる。

②素材を集めるところから活動が始まることで、子どもたちはそれぞれの基準をもって選択し、素材を組み合わせながら制作することができる。

2. 準備するもの

- 葉っぱ　• 木の実　• 丸く切った段ボール　• リボン
- ハサミ　• 木工用ボンド

3.実践の流れ

(1)冬のメダルのつくり方を説明し、集めてきた葉っぱや木の実から、好きなものを選んでもらう(図５)。

(2)丸く切った段ボールの上に、手に取った葉っぱなどを並べ、どんなメダルにするか配置を決める。

(3)配置が決まったら、木工用ボンドで接着する(図６)。凹凸が大きいものはボンドを少し多めに塗る。余分なボンドはヘラでのばすなどし、早く乾くようにする。

(4)好きな色のリボンを裏に貼り、ドライヤーでボンドを乾かして接着できたら完成。早くできた子は何個でもつくる(図７)。

4. 活動の留意点

葉っぱが乾燥しすぎて割れてしまうものがあったり、薄いものだとくるっと丸まるなどして、ボンドが塗りにくいものがあったりするので、別のものに交換したり、ボンドの塗布を手伝ったりすること。ボンドを塗りすぎると乾きが遅くなるので、ヘラでのばすやり方を見せる。

5. 発展

【ならべる+くらべる　しぜんの法則】

グルーガンを使うことで効率的に葉っぱや木の実を接着していくことができる（図８）。ただし、グルーガンは火傷の心配もあり、子どもだけで扱うことは避けたい。また、電圧の問題もあり、部屋によってはブレーカーが落ちないよう、使用可能ワット数を確認しておく。100円ショップなどで手に入るものはだいたい10W程度の低温タイプで、火傷の心配は少ないが、コードが短いこともあるので、延長コードを用意するとよい。500円以上にすると14～15Wのものがあり、熱量が大きい分、グルーがよく溶けて作業が早いが、扱いに注意してもらいたい。

効率的な接着ができれば、大きな作品にも挑戦することができる。葉っぱの形や色を見比べながら、同じものを等間隔に配置したり、グラデーションに並べたりしていき、最終的にシナベニヤのキャンバスに貼って完成。松ぼっくりなどは板に穴を開けて、針金で固定するとよい。キャンバスを正方形にするとどこからでも手が届きやすくなる（図９～10）。

〔加藤克俊〕

23. スタンプ遊びの実践

スタンプ遊び（型押し版画）は、野菜（オクラやレンコン、ブロッコリー、ピーマン、玉ねぎなど）や人工物（段ボールやゼリーの空き容器など）、指や手のひらなどに絵の具をつけて、その形を写し取る行為の連続によって表現活動を展開させていく実践である。

身のまわりにある様々な素材を版として取り上げることによって子どもはものの形に目を向けるようになり、版として使えそうな素材を自ら探すようになると楽しさはより一層広がっていく。偶然できた版の形や意外なものの形がイメージを想起させるきっかけとなることも多く、スタンプ遊びの魅力といえよう。

1. 実践のねらい

①身のまわりにある様々な素材がスタンプ遊びの版として活用できることを知る。

②スタンプ遊びを通して、様々な素材がもっている形の面白さに気づく。

③版の形や絵の具の色からイメージを膨らませながら、スタンプ遊びを楽しむ。

④スタンプ遊びの版になりそうなものを探したり、自分で版をつくったりして創意工夫を試みる。

2. 準備するもの

- 紙（画用紙またはコピー紙）
- スタンプする素材…切り口に変化のある野菜、段ボール、ラップなどの芯材、ペットボトルのキャップ、ゼリーの空き容器など（図１、２）。
- スタンプ台…食品用のトレイやタッパーの中に、絵の具を染み込ませたスポンジやガーゼを入れたもの。絵の具は、赤・青・黄の３色程あるとよい。
- キッチンペーパー…版についた絵の具や余分な水分をふき取るため。
- 下敷き…タオルやガーゼ、板状の段ボール、新聞紙など。
- 手ふき用のタオル…あらかじめ水で湿らせてトレイなどに入れておく。

図１. 切り口に変化のある野菜

図２. 芯材や空き容器など

図３. フタつきのタッパーを使ったスタンプ台

図４. 紙の下に新聞紙やタオルを敷く

3. 実践の流れ

(1)版（スタンプする素材）とスタンプ台を用意する

スタンプ遊びに使えそうな素材を探し、適量用意する。段ボールや野菜などは、持ちやすい大きさに事前に切っておくとよい。野菜は、いろいろな形になるように角度に変化をつけて切ると面白い。ただし、インクをつける面が平らでないとスタンプをした形がはっきりと出ないため、準備する際には注意が必要である。

スタンプ台には食品用のトレイが手軽に用意できて便利である。ただし、前日に準備をしておいたり、数日間にわたり同じスタンプ台を使用したりするのであれば、密封できるフタつきのタッパーが最適である（図３）。

(2)版に絵の具をつけて紙に押す

版の素材や大きさ、形状によって、版につける絵の具の適量は異なる。また、紙が少し沈むように、紙の下にタオルなどの柔らかいものを敷いておくと、形がきれいに写りやすい（図４）。

図５. いろいろな形や色の組み合わせ

図６. 段ボールやペットボトルのキャップでスタンプした作品

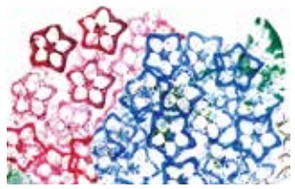
図７. オクラでスタンプ遊びをしてつくった「あじさい」

図８. スタンプ遊びを楽しむ子ども

図９. スタンプ遊びでつくった電車とスタンプした手形

絵の具が乾燥してしまうときれいに印影が出ないこともあるので、なるべく手早く押すように心がけるとよい。大きめの版は、ずれたりかすれたりしないように両手でしっかりと押すことがポイントである。

(3)形や色を組み合わせる

同じ形を連続してスタンプしたり、異なる形どうしを組み合わせたりすることによって、様々なイメージを表現することができる（図５～７）。子どもが自らスタンプ遊びの版になりそうなものを探したり、版をつくったりする活動も大切にしたい（図８）。また、使用する絵の具の色を替える際には、版についた絵の具をキッチンペーパーでふき取るとよい。形や色を組み合わせていくうちに新しいイメージが生まれてくることもあるので、紙を多めに用意するなど、子どもが思う存分スタンプ遊びを楽しめる雰囲気や環境づくりにも配慮できるとよい。

絵の具が指につくことによって、指によるスタンプ遊びや手形のスタンプへと興味が移っていく子どもの姿も予想される（図９）。

4. 活動の留意点

- 様々な素材を使ったスタンプ遊びを保育者が事前に試しておくことによって、必要となる指導や援助について理解することができる。
- 汚れることを想定してエプロンを着用するなど、制作時の服装にも留意しておくとよい。
- 活動前に机の上に新聞紙を敷いておくと、後片づけが行いやすくなる。
- できあがった作品を乾燥させる棚やスペースを、あらかじめ確保しておくとよい。

5. 発展

- スタンプ遊びによって構成された様々な形や色を活かして、イメージを広げながらクレヨンやサインペンなどで絵を描き加えていく。
- スタンプ遊びによってでき上がった作品を活かして、帽子や手提げ袋などを制作する（図10）。
- ロール画用紙や模造紙などの大きな紙を用意し、みんなでスタンプ遊びを楽しむ実践へと展開する（図11）。

図10.「スタンプ帽子」

図11. 共同制作によるクリスマスツリー

［藤田雅也］

42. 光・影絵―ボンド・セロハン用いた実践

切り抜いた紙に光を当てると様々な形の影ができる。また、色ボンドで描いたビニールシートや色セロハンに光を通すと光の色は変化する。影の形や色を楽しんだり、場所や光の当て方を考えたりすることを通して、空間や環境の雰囲気が変化することを子どもが感じ取るようにしたい。

「光を透す絵の具で描こう」

図1. 混色してつくった色ボンド

図2. ビニールシートに筆で描く

図3. ビニールシートに手で描く

図4. シートに光を透かしてみる

図5. 太陽光で映し出された模様

1. 実践のねらい

①身近な材料で透光性のある絵の具をつくり、色の混色や大きなビニールシートに自由に描くことを楽しむ。
②乾いた色ボンドに光を透すと、光の色が変わることに気づく。
③飾ったり窓ガラスに貼りつけたりして空間の雰囲気の変化を感じる。

2. 準備するもの

- 木工用ボンド　• 食紅（赤・青・黄があると良い）　• 割りばし
- 中性洗剤　• 水　• 空き容器　• 筆や刷毛　• 新聞紙
- 透明ビニールシート1m×2m程度（又は透明ビニール袋を切り開く）

3. 実践の流れ

(1)色ボンドをつくる

①空き容器に食紅を耳かき１杯程入れ（色の濃さにより量を調整する）、水を数滴入れて溶かす。
②ボンドを50ml程入れ、中性洗剤を１滴入れて割りばしで静かによく混ぜる。激しく混ぜると気泡ができやすいので注意する。

食紅（赤・青・黄）を混色すると様々な色をつくることができる。食紅の濃さを変えるとグラデーションをつくることができる（図１）。

(2)ビニールシートに色ボンドで描く

①机・床等に汚れ防止のために新聞紙を敷く。その上に描画用のビニールシートを敷き、セロテープ等でビニールシートが動かないよう固定する。
②筆・刷毛・手などで自由に描く（図２、３）。色ボンドののびが悪ければ、水を数滴加えて調整をする。

(3)乾燥させる

ボンドが乳濁色から透明になり固まるまで、半日～１日程度乾燥させる。

(4)光を透かして、カラフルな光を映し出す

ビニールシートごと屋外に持ち出し、光を透かして壁、木、人などに映し出された色の影を楽しんだり（図４、５）、暖簾（のれん）やカーテンのように展示し、空間の変化を楽しむ。また、色ボンドを厚く塗るとシート状に固まり、ビニールシートからはがしやすくなる。簡単に貼ったりはがしたりでき、窓ガラスに貼って楽しむこともできる（図６）。

4. 活動の留意点

- 日光で遊ぶ時は、直接太陽の光を見ないように注意する。
- シート状に固まったボンドが乾燥して貼りつきにくい時は、窓ガラスを軽く水ぶきすると貼りつきやすくなる。

図6. 窓に貼りつけて室内に水族館をつくり出す

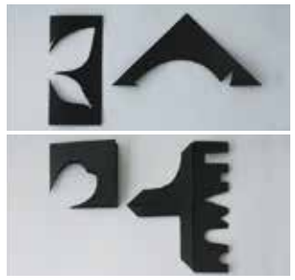
図7. 二つ折りにして切り取る（上）四つ折り、部分折り（下）

図8. 広げた状態

図9. 色セロハンをノリづけする

図10. 映し出された光の色や形

図11. 太陽の光を透かしてみる

5. 発展

着色剤として、透光性に優れた食紅の他に不透明水彩絵の具で色ボンドをつくると、光が透ける部分と透けにくい部分ができ、作品表現の幅が広がる。シート状に固まったボンドの上にさらに油性ペン等で描き加えてもよい。

「光の世界ステンドグラス」

1. 実践のねらい

①紙を折りたたんで切ると、穴を開けられることに気づくようにする。
②紙を２つ以上に折りたたんでから切り、広げた時にできた形を楽しむ。
③色セロハンに光を通すと、光の色が変わることを知る。
④光の色や型抜きした紙による影の形や美しさを楽しむ。

2. 準備するもの

- 色画用紙（黒など濃い色）　• 色セロハン　• スティックノリ
- ハサミ（カッターナイフ）　• 新聞紙　• 重石になる本等

3. 実践の流れ

(1)色画用紙を切り抜く

①色画用紙を、中心または、部分的に２つ以上に折りたたむ（図７）。
②ハサミで自由な形に切り取り、広げる（図８）。

(2)色セロハンを貼る

①穴の大きさよりも１㎝程大きくセロハンを切る。複雑な形の場合は、おおまかな形でよい。
②穴の周辺１㎝程にノリを塗り、セロハンを貼る。台紙の下には新聞紙を敷き、ノリは穴からはみ出さないよう少しずつ塗るとよい（図９）。

(3)乾燥させる

ノリが乾く際にセロハンが縮み、色画用紙が丸まることがある。作品は新聞紙等で挟み、重石を乗せて乾燥させる。

(4)作品に光を透かして、光の色や形を映し出す（図10、11）

屋内や屋外で光を透かして色の影や形を様々な場所に映し出して楽しむ。どこに貼りつけると光の影が美しいか、光の通り道を探しながらステンドグラスのような効果を楽しめる場所を見つけ、窓ガラス等に貼りつける。

4. 活動の留意点

- 水分の多い水ノリを使用するとセロハンが縮みやすいので、スティックノリやスプレーノリなど水分の少ないものを使用するとよい。
- カッターナイフは、安全に配慮して設計された子ども用のものを使用するとよい。使用の際は、カッターマットを敷いて切り抜く。

3. 実践の流れ

セロハンに油性マジック等で描き加えると、より豊かな表現ができる。また、カッターナイフの使用に慣れていれば、台紙に下絵を描き切り抜くことでより自由な表現ができる。

子どもがそれぞれ作品をつくるだけでなく、個々の作品をつなげて大きな作品に仕上げて楽しむこともできる。また、一つのデザインを共同制作によって子どもみんなで制作することもよいだろう。　［本田郁子］

1.乳児の表現

生後１年頃までの乳児は、幼児のように絵を描いたり身近にある材料を使って作品をつくったりというような具体的な造形表現はできないが、心身の発育や発達が進む中で、自分自身の存在や自分と周囲との関係の把握に努めたりすることによって、将来の造形表現のための準備を行っている。はっきりとした反応や変化がなくても、乳児は周囲との関係の中で多くのものを感じ取り、自らの中に取り入れている。月齢や個々の成長に応じて、自然の光や風、虫や鳥の鳴き声などに触れられる機会をつくるとともに、「花がきれいだね」「風が気持ちいいね」「鳥さんがきれいな声で鳴いているね」などの声かけ・言葉かけをすることによって、安らかな気持ちの中でいろいろな刺激を受けられる環境を整えるようにしたい。

図１. 誕生してすぐの赤ちゃん

図２. 新生児反射を見せる頃の赤ちゃん

図３. 手足を盛んに動かすようになる

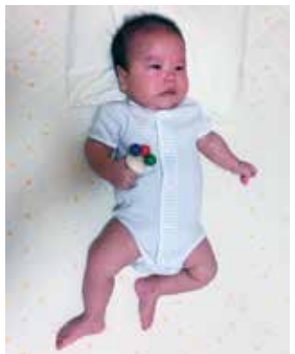
図４. ガラガラをしっかり握ることができるようになる

1. 将来のための成長

新生児期の赤ちゃんは、手のひらや足の裏に何かが触れると、ものを握ろうと指を曲げるしぐさをしたり（把握反射）、唇か口元に何かが触れると、顔を動かして口を開けてそれに吸いつこうとしたり（口唇探索反射）する。「原始反射」「新生児反射」ともいわれるこれらの一連の行動は、赤ちゃんがまわりの世界に適応するために行っている自発運動であると捉えられている。つまり、誕生後まもなく、人は自分のまわりのモノやヒトと積極的に関わっていこうとしているといえる。このことは、他の動物と違って、人は誕生後に大人の保護を受け、養育されることがなければ成長していくことができないことを示している。赤ちゃんは、将来に向けて望ましい発育・発達をしていく中で、人間として成長していくために、周囲にいる大人に守られながら、将来のため必要な心身を成長させていくのである。

2. 将来の造形表現につながる子どもの成長や変化の様子

⑴０歳０か月（新生児）～

目はぼんやりと見える程度だが、顔を近づけるとじっと見つめる。焦点が合う位置でゆっくり動くものを追視する。視覚以外の五感は発達していて、母親の匂いや声がわかるといわれている。大きな音にビクッと反応する「モロー反射」や、手のひらに触れると握り返してくる「把握反射」など、無意識に体が反応する「原始反射」「新生児反射」（図１～２）が見られる。ガラガラを握らせても、この頃には、まだしっかり握ることはできない。鐘や鈴の音を聞かせると動きが止まったりする。

⑵０歳１か月～０歳２か月

手足を盛んに動かしたり、体を反らせたり顔を動かしたりと、動きが活発になってくる(図３)。目の前の人を追視するようになったり、声のした方向を向いたりする。あやすと笑ったり、目の前のものに反応したり、「あ～あ～」「う～」などの喃語（なんご）が出るなど、コミュニケーションを楽しめるようになってくる。両手をパーできるようになる。ガラガラを握らせるとしっかり握れるようになってくる(図４)。この頃になると、光・音・風・匂いなどで五感が刺激されることから、それらを少しずつ感じる機会をつくったり、声かけをしたりするとよい。

図５. 身体を確かめるように、指や手足を舐めるようになる

図６. 声を上げて笑うようになる

図７. 目の前にあるぬいぐるみをじっと観察したり触ろうとしたりする

図８. 腹ばいした時にも首を持ち上げることができるようになる

図９. 寝返りができるようになる

⑶０歳３か月～０歳５か月

自分の身体を確認するかのように、指や手足を舐める(図５)。おもちゃを握ったり、声を上げて笑ったりするようになってくる(図６)。動くものを目で追うようになり、自分の手が動くことにも興味が出てくる。好奇心旺盛に周囲を観察したり、何かを触ろうとしたりして、様々なことを吸収していく(図７)。首のまわりの筋肉が発達して、腹ばいにしたときにも自分で首を持ち上げられるようになってくる(図８)。足で床を蹴って上に移動する「背ばい」や寝返りができるようになってくる。

⑷０歳６か月～０歳８か月

仰向けから腹ばいに、腹ばいから仰向けにと寝返りが自在にできる子が増えてくる(図９)。近くの物を手でかき寄せて取ったり、おもちゃを持ち替えたり、ぴょんぴょん跳ねるような仕草をしたりすることができるようになってくる。手や指の動きが発達してきて、積み木などが掴めるようになってくる。小さいものを指先で摘まもうとする(図10)。座ることができるようになると両手両腕を自由に動かすことができるようになり、手や腕の使い方がさらに盛んになってくる(図11)。

⑸０歳９か月～０歳11か月

おもちゃの出し入れができるようになる。好奇心から、ティッシュを何枚もひっぱり出したり、本棚や引き出しの中身を出したり、いろいろなものや場所を触ったりするようになる。小さな物を指で摘まむことができるようになる(図12)。枠や型に合わせてはめたり外したりするおもちゃで遊ぶことができるようになる。つかまり立ち(図13)・伝い歩きができるようになってくるとソファーなどによじ登るようになる。積み木を積み上げようとする。クレヨンなどで殴り書きができるようになる。ボール遊びができるようになる。

3.心身の発達・成長から造形表現へ

子どもは、生後１年頃までに成長する中で、自分の手先や指先を含めた身体全体をある程度自由に使えるようになってくる。また、いろいろな人との関係の中で自分と他者がいることを知り、多くの場合、まわりの大人に守られた中で安心感を得て、その中で心も豊かに育まれていく。また、いろいろなものを見たり触れたりする中で、ものの形、色、手触りなども、経験の中で知っていく。そのような成長や経験の過程を経て、さらにその後触れることになる玩具、描画材料、造形材料、身のまわりにある様々な材料との出会いの中で、実際に造形的な表現のきっかけを得る。そしてさらに造形的な表現が深まっていく。　［樋口一成］

図10. 物をしっかりと握ったり摘んだりできるようになる

図11. 座って両手両腕を自由に動かすことができるようになる

図12. 小さなつまみを摘まんだり回したりできるようになる

図13. つかまり立ちができるようになる